

■ 書 評



統合失調症は癒える —中井久夫と考える患者 シリーズ 3—

中井久夫 監修・解説
ラグーナ出版
2017年10月 256頁
本体価格 2,500+税

読後感に豊かな広がりがある。よい本に巡り会った幸せを感じた。

この本は中井久夫氏とラグーナ出版とのコラボレーションである。ラグーナ出版は鹿児島市にある精神科医・精神保健福祉士・当事者が協働する出版社である。精神科病院での当事者の体験談や創作をのせる「シナプスの笑い」という同人誌の発行が核になって、2008年出版社へと発展し、就労継続支援A型事業所や生活訓練施設を併せ持ち、複数の当事者が働いている。本書は中井久夫氏の統合失調症についての言説シリーズ3作目である。

第1章は、ラグーナ出版の会長・精神科医の森越まや氏が問いを発し、それに答える形で中井久夫氏の言説がある。統合失調症の治療を学ぶにあたり、中井久夫氏の論文に目を見開かれる思いをした精神科医は多いと思う。たとえば病気になる人を「遭難しかけたときに山頂に向かって避難しようとする人」になぞらえ、疲れ果てて山頂にいる人と出会って、安全に麓まで寄り添う仕事が治療者の役目であると説いている。また治療者が相手の気持ちに届く言葉を用意するときに、「よく寝て、頭をぶらぶらにして」余裕を持って、今まで言われなかったことを言ってみることを勧めている。「家族の方々にお伝えしたいこと」という小節も簡明だが深い。今さらのようにして上質の芸術であると思った。読後感に酔い、深い思索を得た。

第2章はラグーナ出版で働く経験をした2人の当事者（考える患者）の体験談である。発症までの生活、病気の始まり、回復の道のりと現在とが、直裁な表現で語られ、そのごつごつとした肌触りは、第1章のすばらしい音楽に浸っていたところを生々しい現実に戻さずにはおかない。

第3章は再び中井久夫氏の言説であり、第1章とともに出典が明記され、より深く学べるように配慮されている。薬物療法についての中井氏の有名な姿勢や、「私が電気ショック治療をしない理由」など、やはり豊かな啓示に富んだ章である。

第4章は、中井氏の言説に対して4人の「考える患者」のコメントが続くという形式で展開されるが、評者はこの章において最も考えさせられることが多かった。中井氏が説く有名な、「心の生ぶ毛」が回復に際して病気の人にも治療者にも重要であるという説明に対して、4人の考える患者さんたちの反応は概して即物的であり、「私には何ともいえない」という素っ気ない反応の人もいる。急性期における語りかけで「本当は大丈夫なんだよ」と繰り返しささやくという中井氏に対して、「初回は信頼するのはとても難しい」「聞き流すだけかもしれない」という反応も書かれている。治療の粋を象徴的に述べる中井氏に対して、患者さんたちは具象的で生々しく率直である。幻聴などの精神症状に対しても患者さんたちのほうがより重みを置き、切実であるように思われる。中井氏はそうした感想に対して、「そうだね」と笑顔で受け止めつつ、より楽観的で回復へと向かう方向をさりげなく（生々しく具象的ではなく）指し示すのであろうか。

中井氏は本書の中で、常勤医のみの平均的だが質のよい治療を提供している精神科病院での体験が、さまざまな言説を築く礎になったとしている。そこでは統合失調症の人たちはしばしば「世に棲む患者」であり、深い謎をもつ崇高な存在であったのだろう。急性期治療流行りの現在、そして隔離・拘束や電気治療が再び増えてきている現状の中で、こころの中を豊かに語り合う時間がどんどん減ってきているのではないか。生々しい患者さんの体験にゆとりを持って対応できなくなっている現場が思い浮かぶ。そして地域ケアが展開してくるにつれ、患者さんたちはどんどん現実の生活に悩む人になっていく。それはノーマライゼーションであるけれども、同時に病気の深淵から豊かに学ぶことが減ってきているかもしれない、という思いも抱く。精神科医こそ、こうした「心の生ぶ毛」を持っているべき仕事なのではないかと感じた。

(池淵恵美)